

未来に残したいもの 伝えたいもの

第1回 農村文化の豊かさ

庄銀総合研究所 研究顧問 東山 昭子

遠く雪に覆われ、神々しいばかりに輝く秀峰鳥海山、そして霊峰月山。この時期、里山に連なるブナの原生林は堅く引き締まった裸木の美しさをさらし、来る春に向けて静かに力のこもった内部燃焼の日々を始めている。まもなく庄内平野は厳しい地吹雪に見舞われながらも、ゆったりと豊穡の地力を育む冬本番を迎える。神々に守られ、日本海に抱かれ、赤川と最上川の水が潤すこの地には本物の農が息づく「日本のふるさと」がある。

羽黒山に向かう神路坂近く、大鳥居西方に広がる「毛呂農場楽土苑」は、故郷であるまほろばの里・高畠とともに、食と農を考える時の私の原点である。広さ17ヘクタールの敷地には、四季折々にハーブの香りが溢れ、花木が鮮やかな彩りをなす。苑内どこからでも、東に月山、北に鳥海山、遠く砂丘林が青くかすむ庄内平野の広がりを見られ、まさに「天恵の沃野」を実感させる。

平成元年4月、苑は「安全安心美味の実験農場」、「国際交流農業体験研修」をコンセプトに毛呂千鶴夫・富美子夫妻によって創設された。「地産地消」「有機栽培」「スローフード」「食育」という言葉がまだ定着しないずいぶん前から熱心に取り組んできた。

今や家庭の食卓には「旬」が失われてしまっているが、苑では大地の恵みをたっぷりとたたえた産物が、確かな味と香りを示している。また、晴れの日と曇りの日を峻別して行われる農事は四季の巡りを体感させ、伝統行事には、昔からの食べ物を素朴に守っている伝統の食膳が備えられ、天地自然への感謝と祈りが捧げ

られている。

苑を訪れる園児や小・中学生、高校生たちは、初めて食する桑の実で口と手を染め、生まれだての羊に歓声をあげ、自分で引き抜いた大根やサツマイモに感動する。高齢者も時を忘れて栗を拾い、ベランダ畑の雑草を抜く障がい者たちの眼もあたたかく笑う。「食の都庄内」の親善大使たちも折にふれ、新鮮な食材を求めて苑を訪れる。

世界各国からも多くの客人が訪れているが、みなこの苑で農村文化に魅了され、なかでもモンゴルから多年にわたり留学してくる高校生たちにとって、いつもあたたかく迎えてくれる毛呂パパと毛呂ママはふるさとそのものである。

農は本来、知的な総合産業である。減反や転作、米の消費量低下など厳しい経営が迫られているなかで、良質の食材生産という第一義的な職能のほかに、多様な産業との横断的な連携を強め、再生産を維持し、さらに拡大する智慧を働かせたい。例えば農業者の高齢化をカバーする農機具、米粉のような新しい食品加工技術、また規格外の農産物でも学校や病院の給食に導入できるようなカッティング機の開発などが連携によって可能になれば、食の自給力はさらに向上するだろう。

季節ごとに収穫される生きのよい農産物、人々のあたたかい笑顔、忘れられていく農村文化がこの苑には溢れている。喜々として繰り返される苑内の営みを眺めながら、これからも農と食の文化を残し、いのちにつながる営みを未来に伝えたいと願ってやまない。